

近代日本における都市民衆運動とその論理
－1900年代～1920年代の港湾都市神戸を事例として－

藤田貴士

本研究では、1900年代初頭から1920年代にかけて日本社会で発生・展開した民衆運動とはどのようなものであったか、その歴史的意義について考察することを目的としている。具体的には、港湾や運輸などインフラ基盤が整備されたことで近代都市として重視されていた神戸を対象地域とし、そこで頻発した民衆運動の実態を明らかにするとともに、その背景にある民衆の論理、また社会の反応なども合わせて考察する。

1900-1920年代にかけて、神戸では日露講和反対騒擾や小寺邸襲撃事件、米騒動、また三菱・川崎造船所争議をはじめ、大規模な民衆運動が頻発している。個々の運動における参加主体や行動形態、運動論理などを検証することで、民衆運動の様態や歴史的な性格を浮き彫りにする。

同時に、非日常的に生じている民衆運動の発生要因を考察する際には、運動局面のみならず民衆の日常的な営為(労働や生活)にも着目する必要がある。よって、民衆運動の検証のみならず、それと並行して日々の生活を含む民衆の日常的形態を射程に入れ、いわばそれらの総体とも目される民衆世界の具体的様相を明らかにする作業が求められる。

そこで、本研究では、民衆生活から民衆運動への転換過程に際しては、前者の何らかの破綻が契機になっており、そうした社会矛盾こそが後者のような異次元への展開を促す要因となっているのではないか、という試論を提示する。具体的には、運動過程では煽動・便乗によりさまざまな参加者の主体化が図られているが、憂さを晴らすかのようなそうした動きの背景として、日常的に民衆の抱える不満があり、民衆世界におけるその所在をこそ突き止める必要があるのではないかと考える。

とはいえ、それは民衆自身が直接的には言語化できないような問題である。民衆世界や民衆の論理として説明する場合にも、その実態・様相を直接的に把握することは、決して容易ではない。そこで筆者は、日露戦後における経済的困窮、また民衆娯楽(広い意味での民衆文化)に対する官憲の取締りといった社会・経済的な状況にこそ着目し、そこから垣間見える鬱屈や不満といった情動的な民衆感情こそが、参加動機としては決定的な要素ではないかと考える。ゆえに、騒擾や運動という非日常的な「事件」を論じることはもとより、そのみならず日常生活における官憲との折衝のような小さな「事件」にも着目し、その検証および実態解明を試みる作業も同時並行的に行う必要がある。それによってこそ、民衆世界の様相を少しでも浮き彫りにすることが可能となり、また運動への参加動機ともいべき民衆の論理を説得的に提示できるものと考えている。

民衆運動や民衆生活に関する研究を概括すると、①都市民衆騒動研究・米騒動研究、②労働運動史研究、③都市下層研究・都市社会史研究、④民衆(思想)史研究・民衆運動史研究に整理される。それぞれの研究領域から民衆運動や民衆生活の諸相が明らかにされるとともに、近年では民衆運動や民衆生活における暴力の存在が重視されつつある。こうした変化を受けて、先行研究では主題化されることのなかった民衆運動や民衆生活の周辺に位置する存在である女性や子ども、在日朝鮮人などを主体化するとともに、かれらに対してどのような暴力が引き起こされていたのかを明らかにする研究が進展しつつある。いわば社会の周縁を意識した民衆史研究が企図されている。

本研究は、このような研究動向を踏まえ、民衆運動や民衆生活について論じる際にも、かれらの

ような存在に留意するとの意味から、社会の反応という視点を重視する。ややもすると壮年男性を主語とした「民衆」という概念に再考をせまるとともに、あくまで生活主義に徹し、それを基軸とする自律的で固有な文化を有した歴史的な主体として「民衆」を規定しておく。「民衆」を単一の主体に還元せず、それとともに民衆運動を主導した参加者にのみ着目するのではなく、傍観者、近隣住民、在日外国人、警官などのさまざまな主体を想定しており、それぞれの立場に即する形で運動を捉え返す。こうした方法を取ることで、階級性はもとより、ジェンダーや民族などの要因にも目を配り、その結果として民衆運動の複合的な性格を解き明かすことを試みる。

なお、本研究で用いる史料に関しても、言及しておく。そもそも民衆自身、自ら史料を残すことがほとんどないため、民衆に関する史料とは、基本的に他者の眼差しを介したものがその大半である。ゆえに、それらの史料を通じて民衆の営為を復元するしかなく、バイアスが伴っていることを十分に自覚したうえでの読解＝史料批判こそが必要となる。

本研究において利用する史料は、①官憲記録、②裁判記録、③新聞記事、④特定史料(ルポルタージュ、自伝、伝記)である。官憲や記録者のバイアスを鑑みながら、そこに垣間見える民衆の論理や心性を読み解くというスタイルを採る。①②は権力側の眼差しであることに十分に留意して、そのバイアスを注意深く読み解くことによって、思いもかけず「事件」の性格、民衆の論理や心性、ひいては民衆世界の一端を掘り起こすことが可能となる。また、④は当事者の偏見や恣意性が多分に伴うものの、ルポ＝即時的／自伝・伝記＝回顧的というそれぞれ特徴的な性格を持った史料であるがゆえに、両者の制約を踏まえながらも慎重に取り扱うことで、「事件」の性格を複層的に読み解くことができる。殊に、ルポに関しては、民衆の日常性を復元するうえできわめて有効な史料であるということが、近年の歴史学研究において強調されるに至っている。さらに③は、紙面において「事件」を即時的に報道するという特質に加え、雑報欄などから「民衆の声」を拾い上げることも可能となる。報道の限界(誤報の有無)や新聞記者の民衆に対する視線といったバイアスなど、その多義性を如何に読み解くかという点に留意する必要がある。複数の報道を見比べることも不可欠である。こうした課題点はあるが、④が持つ史料的な有用性や可能性もまたつとに指摘されている。

以上のような性格の異なる4つの史料群に対して、それぞれに史料批判を行いながらも相互に組み合わせて検証する作業を行うことで、「事件」の複層的な性格やその背景について、複眼的な立場から読み解くことが可能となり、さらにそれらのなかにも垣間見えてくる民衆の論理、ひいては民衆世界の様相などについて、その一端を解き明かすことが出来るものと考えている。

さて、本研究における各章の要約は、以下のとおりである。

近代日本における都市民衆運動の始点となるのが、1905年東京で勃発した日比谷焼討事件である。この事件に関する報道が伝播するや地方都市でも騒擾が展開することとなり、その影響は神戸においても顕在化する。第1章で取り上げたように、伊藤博文(初代兵庫県知事)銅像襲撃という民衆の特異な行動がみられた神戸の騒擾は、日露戦争下における銃後の民衆生活の疲弊に加え、市内にペストが再来しそれに伴う「ペスト・ノイローゼ」が深刻となるなか、戦争の条約締結をめぐって講和反対の論陣を張った新聞社による政治キャンペーンによる狂騒的な政治熱が隆盛するその渦中において勃発した。「講和問題神戸市民大会」に集った聴衆が、湊川神社へと雪崩れ込み、境内にも数多の群衆が寄り集まる。そして銅像を引き倒し、それを市内に引き回しつつ、派出所襲撃が繰り返され、一般商店もまた被害を受ける。それはまさに、銃後においてストレスフルな生活を強いられた民衆が、欲望解放のままに弥次馬的に参集した刹那的で祝祭的な性格を持つ騒擾であった事実を浮き彫りにする。もっとも祝祭化のみでこの民衆騒擾は語れない。集結地である湊川

神社は忠臣楠公を祭神とする場であり、そこに講和問題で標的となった元老のシンボルで「徳望なき政治家」伊藤博文の銅像が座すことへの民衆的不満を梃子としており、民衆文化の抑圧者たる官憲への怨嗟も再燃しているのである。ゆえに、そうした民衆の集合心性が働いていたことや騒擾における民衆暴力が祝祭化＝解放願望とともに、日頃の不満・怨嗟が噴出というガス抜きによって顕在化したという特徴があり、都市民衆運動が「胎動」した所以である。

それは第2章で論じた1913年の小寺邸襲撃事件の場合も同様である。憲政擁護運動が政治熱となって日本社会を席卷するなか、東京で開催された国民大会の後、首相官邸や新聞社、派出所などが襲撃される事件が生じ、翌日には大阪でも同様の事件が発生した。こうした襲撃事件がセンセーショナルに報道されるなか、立憲国民党を脱退し桂太郎首相の新党結成計画に参加した小寺謙吉をはじめとする神戸選出の代議士に対し、地元紙には小寺を「変節代議士」として批判する記事が連日のように掲載され、小寺らを批判する気運が着々と醸成されるなか、遂に2月13日夕刻、「変節代議士」の各邸宅、官僚派と目される新聞社、また電車や派出所などが襲撃される騒擾が発生する。政治家への件嫌悪感や不信感を動機としつつも、やはり日常的な不満の捌け口として引き起こされた側面があり、この場合にも騒擾は祝祭化したきらいがある。弥次馬に象徴される民衆の好奇心が動員力となっており、代議士の邸宅が焼き討ちされるや喝采が沸き起こったという。

こうした政治家への嫌悪感や不信感を動機とした2つの騒擾とは対照的に、第3章の米騒動は市内の米商が襲撃されるとともに、その総元締めのような立場にある鈴木商店や財閥の庇護下にあった新聞社、さらに借家管理業者として家賃の取り立てや値上げを強行していた兵神館などが焼き討ちされており、米価高騰に端を発する生活不安を動機とした騒擾であることは明白であろう。とはいえ、米騒動でも群衆が束となって酒屋に押し込み酒樽から欲しいままに飲酒した後、酔態で近隣商店を襲撃するような光景が散見された。騒擾の祝祭化という点で共通しており、市内の各所で乱痴気騒ぎが頻発したことなどを踏まえると、先の2つの騒擾よりもそのインパクトは絶大であった。

他方で、第4章で論じた三菱・川崎造船所争議では、当初より規律的な労働運動が標榜されており、「市内一大示威行進」にみられるパフォーマンスと衆人環視を前提とすることでその行動形態を新聞社にアピールし、自らの団体要求を世論に訴えるという指導者の戦術によって牽引された。もともと労働者の側は工場内では実力行使的に物理的暴力を用いており、その背景には会社側や官憲に対する不満のみならず、日頃の鬱屈や憂さを晴らしたいとの情念や、非暴力を説く指導者に対する違和感などが混在していたようである。そのなかで、自らも労働者であった野倉萬治という交渉委員(争議団幹部会議長)は徹底して暴力を抑制する主張を展開しており、法廷でも首尾一貫してその立場を堅持した。近代神戸の民衆運動における唯一の民衆的リーダーといえるが、彼はきわめて稀有な存在であり、逆に言えば、活動家の多くが聴取や公判では後悔や弁明などに終始している。かれらのような小心で臆病な姿こそが、むしろ一般労働者の実像であった。争議の終盤では、官憲との衝突が全面化するとともに、就業を希望する労働者には争議団から“裏切者”との烙印を押され、戸別訪問での説得において暴行や脅迫が頻発するといった、参加強制の論理に基づく民衆暴力も散見される。争議終焉の要因として、官憲による過酷な弾圧と会社側の周到な就業工作が作用したことは間違いないが、何より指導者・活動家・労働者といった三者の思惑がそれぞれに相克しながら展開していったということこそが、当該争議の最大の特徴であった。

これら一連の民衆運動では、祝祭化に象徴される民衆の非日常的な世界が存分に投影されている。では、民衆の日常的な世界とは如何なる諸相であったのか。第5章は、そうした民衆世界の観察者でもあった知識人・賀川豊彦の思索に着目し、「貧民窟」での生活を記録した『貧民心理の

研究』を題材としつつ、賀川の民衆観について検討した。民衆世界への洞察においては同時代の知識人として傑出していた賀川は、自ら「貧民窟」での生活に裏打ちされた旺盛な思索をめぐらすとともに、その自己体験から紡ぎ出された「貧民救済」と「貧民蔑視」の相反する認識を抱え込んだ。そこから、「貧民道徳」や「相互扶助」といった民衆世界における珠玉のような独自かつ固有な価値意識の所在を発見した賀川は、その意義を力説するとともに、そこにキリスト者として伝道の意義を見出した。もっとも暴力化する民衆運動の内実についても冷静に見通していた賀川は、米騒動の勃発を数年前から予期しており、そうした暴動化を全力で忌避すべく、「人格の建造」を希求する。それは暴動において歓喜する民衆の欲望解放的営為を抑制すべく、内省主義・規律化を通じた暴動抑止が企図する思索でもあった。「貧民道徳」として、民衆の道徳的規範を発見した賀川は、より徹底した民衆の自己規律＝規範の洗練を渴望するに至るが、その実践主体となる倫理主義的民衆など、「貧民窟」には存在しない。観察者としての経験とキリスト者としての倫理観との狭間で苦難に満ちた賀川の思索は、第1章～第4章で論じた如く民衆運動が祝祭化して暴力化するその実態を裏付けるとともに、何より民衆世界に息づいていた「貧民道徳」という独自の文化が確かに存在したことを浮かび上がらせるものである。

民衆世界の動静は、非日常的な運動に結集していないとはいえ、小規模な騒擾や事件、官憲との折衝といった局面においてこそ、より具体的な様相として浮かび上がる。第6章で論じたように、日頃の不満や鬱屈などが率直に吐露される民衆の日常的な営為はきわめて重要である。しかし、そうした側面が着目されることはあまりなく、それを主体化した数少ない先行研究であっても、民衆の独自性や固有性について考察するというよりは、その特異な世界観を強調して他者化するきらいがあり、その意義が表層的にしか捉えられていない。そうした民衆世界の一端を明らかにすべく、港湾都市神戸の特徴である港湾労働者に着目し、かれらの意識や行動を検証した。労働や生活を手掛かりに、港湾労働者が主体となった争議、荷抜きや賭博といったかれらに固有の民衆文化の諸相を明らかにした。そして官憲の取締りに対する抵抗、同業者や家族、他者に対する暴力を俎上に載せながら、そうした形で噴出する民衆暴力が如何なる社会構造の下に生み出されたものなのかを読み解いた。官憲に対する嫌悪感を梃子としつつ、やはり自律的ともいえる「貧民道徳」の実相が散見されるとともに、それもまた女性や子ども、在日朝鮮人をはじめ他者への抑圧委譲的な暴力を前提として成り立っている実情を浮き彫りにした。

そしてそれは、港湾労働者のように近代日本社会の底辺部に位置する底辺労働者を基軸として構成される民衆世界であっても、帝国日本の支配構造の下に組み込まれていることを示唆しており、その最底辺に位置づけられていたのが在日朝鮮人であった事実を突きつけている。第7章では、在日朝鮮人社会の様態を民衆世界の「断面」として取り上げることで、民族差別が渦巻く近代日本社会でも生活主義的な営為に徹する朝鮮人労働者が、どのような意識から民族的な抵抗・闘争に立ち上がったのか、その過程をより丁寧に検証することを主題とした。その際には、官憲の取締りもさることながら、日本民衆との関係についても検証を行った。また抵抗・闘争の意義をより根本的に考えるため、在日朝鮮人社会で共有されていた朝鮮飴売りや朝鮮酒の密造といった民族文化の諸相を明らかにした。民族文化に根差す在日朝鮮人の生活営為にこそ内在する日本(民衆)への抵抗意識が発現するとともに、そこには生活主義に根を張った民衆のナショナリズムが民族と生活との位相関係において醸成されていた実情を解き明かした。それはまさに民衆世界における自身の拠点を、同胞との相互扶助に基づく民族的連帯において構築した「異郷地の砦」であるとともに、近代日本社会において絶えず不可視化されてきた民衆世界の「断面」でもあった。

本研究の内容は以上のように要約できるが、近代神戸における民衆運動の特徴として、首都圏で発生した都市騒擾に端を発しており、そこからもたらされた民衆行動に関する情報を起点としていたことを指摘できる。とはいえ、そうした外在的な要因に加えて、神戸という地域に固有な独自の論理によって引き起こされた点こそ重要である。忠臣楠公の論理と伊藤博文銅像の襲撃といった郷土意識とナショナリズムとの混淆は、地域社会を基盤とした民衆運動の為せる業である。日露講和反対騒擾をはじめ、小寺邸襲撃事件や米騒動、三菱・川崎造船所争議など一連の民衆運動が、湊川神社という象徴的な場を核として展開していることは、その証左である。

また、神戸という地方都市では、政治をめぐる政治家や資本家と、民衆との折衝という側面も民衆運動の発生要因となっている。当初は伊藤博文や小寺謙吉といった政治家に対する不満を動機としていたものの、第一次世界大戦後の「戦後恐慌」によって、生活の危機に直面した民衆が敵視する矛先は、米商や鈴木商店をはじめとする資本や自らの雇用主（底辺労働者の場合には親方に対する賃上げ要求、工場労働者となれば大資本たる川崎や三菱といった造船所への大争議）へと向かう。いずれも官憲の徹底的な取締りによって終焉を迎えているが、近代神戸における都市民衆運動としてのインパクトは、発端と目される首都圏での展開をはるかに凌駕するほどであった。

その要因として考えられるのが、近代港湾都市として発展した神戸という地域社会の持つ特殊性である。港湾整備に伴う重工業や流通業の勃興をはじめ、都市開発に伴う基盤的なインフラ整備が急速に進められつつ、他方では国際都市として国内外を問わずさまざまな労働者・生活者が流入してきたことにより、近代日本の政治・経済・社会の総矛盾が集約される形で神戸という都市空間が形成されたという背景であろう。そうした雑多に混合した文化状況において都市形成が図られたという地域的特質の反面、近代都市として地域に共通の文化的地盤が脆弱であったことは否定できない。それゆえに、忠臣楠公の代名詞といえる湊川神社が神戸市民の集客装置として世俗化されたことで、縁日をはじめその場には多種多様な民衆が参集する機会が生まれ、徐々に「楠公さん」として親しまれる祝祭の場としての意味を有することとなった。

つまり民衆運動が躍動化するその跳躍台として、湊川神社という「創られた伝統」が有効に機能を果たしたということであり、何より恰好のガス抜き場として民衆運動が盛大に祝祭化したところに、他地域が比肩できないようなインパクトを持った所以がある。近代神戸の民衆運動は、かかる民衆世界において共有されていた民衆文化を梃子とすることによってこそ展開されていたのである。